

Malice @DOLL

Malice @DOLL

Chapter: 12

Don't Infection

Version 2.0

原案・脚本 / 小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

99/03/13

登場人物

マリス Malice@Dollドール

機械者たち Machineries

ジョー@アドミン Joe@Administrator管理者

デヴォ@ルーコサイユ Devo@Leukocyte.....白血球／異物監視者
メリザ@パイパー Meliza@Piper.....管工事者／笛吹
トッド@リペアラー Tod@Repairer.....修理者／医師
フレディ@リッカー Fready@Licker舐める者／清掃者

ドールズ

ドリス@ドール Doris@Doll.....ドールのリーダー格
ヘザー@ドール Heather@Doll.....メイド衣装の少女
アマンダ@ドール Ammanda@Doll.....アルビノの様な白肌
ミステイ@ドール Misty@Doll.....褐色
エルザ@ドール Elza@Doll半壊半裸ドール
チック@ソルダー Chic@Soder.....半田／電気配線者

白い少女 Ghost Girl

ヴェゼル Vessel.....マリスを変異さすもの

前話リプライズ

第一話の場面（マリスのキスを中心に）・台詞の断片がフラッシュ——

マリス「やめ——、やめて！ メリザ！」

組み合う怪物と怪物。

デヴォの躰から火花が激しく迸り——炎上する。

ピイイイイイ！

メリザの躰が溶けていく。

マリス「やめてええええええ！」

ワーク・エリアノ一時間後

燃え尽きたデヴォとメリザ。金属が溶け、真っ黒になつて融合し、塊となつて床にへばりついている。

そしてマリスは——、

マリスはやや離れたところで放心し、座り込んでじっとしている。

マリス「——御免ね……、メリザ@パイパー……」

マリスの目から——涙が零れた。

下層へ向かうエレベータ

エレベータ内

鈍く振動音が包む庫内。マリスは壁にもたれて座り込み、虚ろに見上げている。

ガクン。突然止まるエレベータ。

マリス「……」

扉が開き——、入つて来るのはトッド@リペアラ。全身から医療具や工具がアームとして突き出しており、老人の様な所作。

マリスを一瞥するが、背を向けてエレベータの操作

盤に指を延ばす。

マリス「——あなたは——、トッド？ トッド@リペアラー？」

トッド「そうだよ。私は修理者だ」

マリス「あたしを——、治して」

トッド、振り向きマリスをジロジロと見る。

トッド「——あなたはマシナリーじゃない。私はマシナリーの修

理者なんだ。すまないね」

マリス、立ち上がってトッドにすぎる。

マリス「あたしはマリス@ドールよ！ あたしはマシナリーなの

！ 判らない？」

トッド「——あなたがドールとな？ はて……。これまで私は数

知れないドールを修理してきたが、そんな躰のドールな

んて見た事も聞いた事もない」

トッドのアームが数本、マリスの躰をまさぐる。

マリス「……」

トッド「この柔らかい膚、この暖かさ、循環液もオイルじゃなさ

そうだ。動力ユニットはいつたどこにあるというんだ

ね。こんな躰のドールはいない」

マリス「——あたしは——、病気なのかもしれないわ」

トッド「だとしても、私にはあなたを治してあげる事は出来ない

な。すまないね……」

絶望するマリス。

快樂門 The Gate of Joy

ひとりぼっちのマリス——。

朽ちた快樂の街。崩れた家の残骸に腰を下ろし、唄を歌っている。

歌う事も、彼女がその日によって替えていた主人を悦ばせる為のものだった。

しかし今は、自分の為に歌っている。

どんなに顔は悲しげでも、声は艶やか。

と——、娼家の一つの扉が開き、女の影が現れる。

歌うのをやめるマリス。

マリス「——こんにちは、ドリス@ドール。久しぶりね」

きつめのメイクを施した、完璧なまでの美女。しかし今はその服も薄汚れている。

ドリス「あなたの媚びた人恋しい歌で目が覚めたのよ、マリス@ドール。情けない声だね、相変わらず。今起きたって、誰があたしたちを買ってくれるっていうのよ。ええ？」

ヒールの音を響かせ、マリスに近づくとドリス。

マリス「あたし——、独りで寂しくって……」

マリスの前に立ったドリス——鋭く目を細め

ドリス「——あなた、誰よ」

マリス「あたしはマリス」

ドリス「——」

ドリス、そっとマリスの頬に、自らの固く冷たい指を這わせる。

ドリス「何よこの躰は——」

ドリスの指、マリスの唇をなぞり——

ぐっ、と少し口腔内に突き入れる。

苦痛に顔を歪めるマリス。

ドリス「何なのよこの躰は！ こんなドールなんていないわ！」

マリス「あたしは——、躰がおかしいの……。おかしくなっちゃ

った……」

ドリス「（漠然とした恐怖）——何よあなたは……」

後退るドリス。

マリス「あたしは、ドールよ」

『違う』、と首を振るドリス。

と、娼家から続々とドール達が姿を見せ始める。

抜ける様に髪も膚も白いアマンダ、褐色のミスティ、

嗜虐者の客に壊されたままの姿の、エルザ——。

アマンダ「あれが、マリス？」

ミスティ「マリス@ドール？」

エルザ「マ、リ、ス……」

マリス「久しぶりね、みんな」

前に踏み出すマリス。

一同、下がる。

マリス「……」

哀しげに止まるマリス。

最後に、小さな影が扉から出て来た。

ヘザー「みんなどうしたの？」

少女の姿、メイド衣装のヘザー。

マリス「ヘザー」

ヘザー「マリス？ あれが、マリスなの？」

マリスの方へ歩きだそうとして――

ドリス「ヘザー！」

びくん、と立ち止まるヘザー。

ドリス「あれはマリスなんかじゃないわ。近づいては駄目よ」

ヘザー「……どうして？」

ドリス「あれはマシナリーですらないのよ。まるで――、まるであたしたちの――マスター達みたい……」

顔を見合わせるアマンダ達。

マリス「――あたしはただ壊れているだけなのに……。あたしは

あなたと同じなのよ、エルザ」

エルザ、俯く。

マリス「――」

マリス、哀しそうに顔を背け、向こうへ歩きだす。

ヘザー「マリス……」

ぐっ。ヘザーの肩を掴むドリス。

ドリス「あれに近づいては駄目。言う事を聞くのよヘザー」

ヘザー「……」

マリスの部屋

〔内装は一話参照〕

フラフラとした足取りで入ってきたマリス。

部屋の調度品、床に散乱する物達を見渡す。

マリス「――誰も――あたしを――」

マリスの視界が歪む。

マリス「……」

ネオンの様な光が、ぐにやりと軌跡を描いて流れて

いく。

暗い室内が——、光に包まれ——

ドール・ファクトリー〔過去〕

マリス、凝視している。

そこは——、ドールの工房。

大量生産のラインではなく、マネキン工房の様な佇まい。

西日が差す、工業地帯の二階の一室。

人の姿は無く、組み立て途中のドールのパーツがあちこちに分散して置かれている。

そして、メインの作業台には組み立て途中のドールの素体。

陶器の様な膚。メカニカルな要素は、間接部の隙間から見えるだけ。

未だ化粧も施していないその顔は——

近づくマリス。

マリス「——あたしは、ドール……」

作業台の上の、素体のマリスが目を開いた。

快樂門〔過去〕

猥雑に賑わう快樂の街。

美しく化粧を施し、着飾ったマリスが微笑んで立っている。

マリスの前に立つ大柄の男（シルエット、あるいは背部からのアングルで顔は見えない）。

マリス「夢を見せてあげるわ。あたしの名前は、マリス」

男、マリスの手をとる。

マリスの部屋〔過去〕

そこは確かにマリスの部屋。

しかし、今のそれとは全く異なる部屋。

ガランとした部屋の中央には、クラシカルなベッド。その手前にカウチとコーヒーテーブル。ホテルの一室を思わせる。

そして、その部屋の床に座らされているマリス。

窓外からの毒々しい光で浮かぶ、大柄の男のシルエツト。

じつと男を見上げているマリス、そつと両腕を揃えて差し出す。

「以下、フラッシュ的に」

ギュー！ マリスの口が無理に開かれ、ボールギャグが嵌められる。

後ろから髪を引っ張られ、上を向かされるマリス。

カウチに腰掛け、脚を組んでいるマリス。

その足元に跪く、違う男。美しいマリスの、ストッキングに包まれた脚に頬を寄せ、エナメルハイヒールに舌を這わせる。

違う男に覆い被される、ベッドのマリス。

違う男に覆い被さるマリス。

両腕を縛られ、上から引っ張られているマリス。その衣服を、大柄の男が持つボウイ・ナイフが切り裂いていく。

まるで聖母の様に、違う男を胸に抱くマリス。

鋭利な刃先がマリスの陶器の様な膚に疵をつけていく。血は出ない。

「これらに拘らず、印象的なカットを重ねて下さい」
そして——、どんな時でも、マリスは微笑んでいた。
どんな酷い事をされても、どんなに男に賛美されて
も——。

現在のマリス「（恐怖）——あたしは……、ドール……」

今のマリスが、過去のマリスの後ろ姿を見ている。
過去のマリスは、ベッドに座った男の靴を舐め続け
ている。

それを、現在のマリスがブルブルと震えながら見つ
めている。

現在のマリス「マリスは、ドール……、（『いやだ……』）」

背を向けていた、過去のマリス、作業をやめ、ゆっ
くりと上半身を起こし——、今のマリスの方に振り
向こうと——

現在のマリス「やだああああ！」

マリスの部屋「現在」

マリスの叫びが響いたその部屋は——、元のままに
戻っている。

マリス「——あたし——、あたしはドールなんか……」

カッタン……。響いた足音に、泣きはらした目を向け
るマリス。

マリス「——へザー？」

物陰からそっと、小さな躰を覗かせる少女ドール。

へザー「マリス、凄く壊れているの？」

マリス「——そう、みたい……。なんだか——、胸が苦しいの。
自分の事を考えると」

へザー、ゆっくりと近づく。

マリス「ドリスに叱られるわ」

へザー「平気。ドリス達はみんな、油を差しに行っているもの」
へザー、マリスのすぐ前に。

ヘザー「——ほんとだ……。マリスの躰、とっても変だわ」

マリスの頬に触れるヘザー。

マリス「——あたしの事、心配してくれたの」

ヘザー「——（黙って微笑む）」

マリス、屈んでヘザーの前に自分の顔を近づけ

マリス「——ありがとう、ヘザー@ドール、あたしはあなたの事、

好きよ」

ヘザー「あたしもマリスの事が好き。綺麗なもの」

マリス「（微笑）来て。キスしてあげる」

ヘザー、顔を近づけ、目を閉じる。

マリス「あたしに出来る事はこれしかないの……」

マリスの唇が、ヘザーの唇に重なる。

暫くそのままにいる二人——。

静寂——。

ヘザー「！」

目を見開くヘザー、ガタガタと震えだす。

マリス「ヘザー？」

マリスを突き飛ばし、よろけるヘザー。

ヘザー「こ、こ、これは何ッ？ どうしちゃったのあたし……」

マリス「ヘザー！」

立っていらなくなり、尻餅をつき、手足をバタバ

タとさせるヘザー。

ヘザー「怖いよ！ 怖いよおおお！」

マリス「ヘザー！ どうしたのよ……」

ヘザー、自分の躰を自分でまさぐる。

ヘザー「あ、あたしの体が……、何だか変なの！ 何だかとって

も変になつていくの！」

マリス、悟る。ヘザーは自分と同じになろうとして

いる事を。

マリス「落ち着いてヘザー。大丈夫だから」

ヘザー、近づくマリスに脅え、後退る。

マリス「ほら、あたしだってちゃんと活動しているでしょ」

ヘザー「——マリス……」

ヘザー、バツと起き上がり、マリスに飛びついて抱

きしめる。

マリス「——！　へザー、あなたの躰、とっても暖かいわ。それにこんなに柔らかい」

へザーの躰を離し、顔に見入るマリス。

これまで無かった表情が、へザーの顔に。

へザー「あたし——、マリスと一緒にになったのね？」

マリス「——（頷く）」

マリス——、艶然と笑み

マリス「——そうよ……、みんなあたしと同じになれば、きっと幸せになれるんだわ……」

娼家

赤い室内。

ソファでだけだるげに座っているアマンダ。

ギツ。ドアが開く。

アマンダ「（見ず）へザー？　勝手に出歩くからドリスが怒ってたわよ。あたしたちいい迷惑だったんだか——」

ドアに、二人の影があるのに気づき——

アマンダ「——マリス……」

マリスと、へザーのシルエット。

アマンダ「——こ、来ないですよ。ドリスに言われたでしょう？」

マリス「幸せになりたくない？　アマンダ@ドール」

アマンダ「しあわせ……？」

へザー「違うものになれるのよ、あたしたち」

アマンダ「違うもの、って……」

マリス、ずっとアマンダの前に歩み寄る。

アマンダ、思わず身構えるが——

マリス「あたしと同じになるの。きつと素敵な事が起こるわ」

アマンダ「いいわよ……、あ、あたしは今のままで……」

顔を近づけるマリス。

マリス「どうして？　永遠にこのまま誰もいないこの世界で、同じ様に過ごしていききたいの？　それが幸せな事？」

アマンダ「それは……」

マリス「あたしにはそうは思えない。変わるの。変わっていいって許されたのよ」

アマンダ「——誰、に……？」

マリス「判らない。でも、きっとそうなの。だから……」

身を竦ませているアマンダの顎を上げ、マリス、唇を吸う。

アマンダ「！（目を見開く）」

くすくす笑いながらそれを見ているヘザー。

快樂門の路地裏

床を舐めている、フレディ@リッカー、近づく人影に顔を上げる。

フレディ「マリスかい？ マリスなんだろう？ おかしいな、視

覚認知とID認知に誤差がある……」

近づくマリス。

マリス「フレディ、キスをしてあげる」

フレディ「そいつは嬉しいね。こんな薄汚れたフレディに、ドルのキスを恵んでくれるとは。けど——、どうして……」

マリス、屈んでフレディの前に顔を近づける。

マリス「あたしが出来る事は、これだけだから……」

フレディ「——マ、リス……？」

マリス、キスをする。

フレディの鋼鉄の躰が——、生き物の様に脈打ち始めた。

別の娼家

ベッド脇の床に、不自然な姿勢で横たわるエルザ。

半壊した躰がギギツギギツと歯車の音を時折立てる。その前に立つヘザー。

ヘザー「エルザ。壊れたままのエルザ@ドール。あたしがキスし

てあげるね」

エルザ「キ、ス……」

快樂門入り口付近

ヒールの音を響かせ、歩いて来るドリスとミスティ。
ドリス「——ふざけているわ！ あたしたちの分の油をちゃんととっておかないだなんて」

ミスティ「でも、また下の階層から掘り出してくるって——」

ドリス「あたしが言っているのはそんな事じゃないわ！」

ミスティ「……」

ドリス「あたしたちドールは、このオーガンの中で不要なマシンリーだっという事なのよ」

ミスティ「でも……、確かにドールはここではする事がもう……」

ドリス「ミスティ！」

おし黙るミスティ——。

ドリス「（嘆息）いいわ、ドールを集めて。これだけのドールがここには残っていて、油が必要だという事をジョー@アドミンに教えてあげなきゃ」

ミスティ、先に立って歩きだす。

ドリス「全く退屈だわ、この世界は……」

ミスティは、娼家のある路地へ曲がっていく。

独り残されるドリス。

ドリス、ふとストッキングに包まれた自分の脚を見る。くきくき、と動かす。膝間接から異音。

深く嘆息し、ドリス、ストッキングをガーターから外し、白く陶器の様な脚部を露出させる。

間接部は球体の複合により構成されている。

幾度か脚を屈伸させるドリス。油が切れているのだ。
ドリス「このままじゃ歩く事だっ出来なくなってしまう……」

ミスティ「何をモタモタしているのよ！ みんなを早く集めて！」

応える声は無い。

苛立たしげに腕を組むドリス。

その背後に——影。

未だドリスは気づかない。

ドリス「ミステイ」返事をなさい！ 聞こえないの？」

影、ゆっくりとドリスに近づく。

ドリス「——つたく……」

ドリス、ストッキングを直そうと身を屈めると——
すぐ背後にいた者に気づいてハッと振り向く。

ドリス「ニ（息を呑む）」

そこに立っていたのは——、エルザ。半壊した躰が
そのまま有機生体に変容している。あまりにも不気
味な姿。

ドリス「——な、何よあなたは……」

エルザ「（微笑む）私よ、エルザ」

ドリス「エルザ……？ その体……」

エルザ「私、生まれ変わったの。マリスのキスのおかげで」

一歩前へ進むエルザ。

即座に退くドリス。

ドリス「マリスに会ったのね」あたしが駄目だって言ったのに
言う事を聞かなかったのね」

エルザ「ドリスもしてもらえばいいのに」

ドリス「ええっ？」

エルザ「マリスのキス。今、とっても気持ちいいのよ、私」

ドリス「何言ってるのよ！ あなたの今の姿……」

エルザ「前みたいに、私は綺麗になったのよ。そうでしょう？

ドリス」

ドリス「（顔を歪める）——」

バツと背を向け、不自然な走り方でその場を離れる
ドリス。

娼家

バン！ 扉を開け、入って来るドリス。

ドリス「ミステイ！ ミステイ！」

ソファでぐったりとなっているミステイ。

ドリス「ミステイ！ どうしたの？」

近づくドリス——、ミステイの躰に起こっている事

を見て、身をすくめる。

ミスティ「ド……リ……ス……？」

褐色の、冷たい輝きを放っていた膚が、今はじつと
りと汗ばんで、肉感的な脈動をしている。

ドリス「——あなたも——、マリスに遇ったのね。」

ミスティ「マリスのおかげで、あたしは生まれ変わるの……。」

このオーガンの中で、いいいい存在になれる……。」

ドリス「——（悲鳴の様に）ふざけないでよおお！」

逃げ出すドリス。

快樂門

走るドリス。

と！ 床を這う奇怪なもの——。

ドリス「ひっ！」

それは、有機化したフレディ@リッカー。ぬらぬら
とした舌で床を舐めていた。

フレディ「（顔を上げ）——おや、ドリス@ドールかね。あんた

は未だ、マリスのキスをしてもらっていないんだな」

ドリス「あんたのその体……。」

フレディ「気持ちいいんだ。体の中をぐるぐるぐるぐる、何かが
走り回ってる。なんだかとっても暖かいんだ……。」

ドリス「（嫌悪）——そんな体になって、何がいいって……」
フレディ「なってみたら判るさ」

ドリス「嫌だわそんなの！」

駆けだすドリス。

しかし——、潤滑油が切れた膝間接がギシギシとな
り、まともに走れず——、転倒。

ドリス「きゃ ああ！」

バタリと倒れたドリス——、必死に上半身を上げる。
と——！

ドリス「……何よここは……。」

雑然と放置されたマシナリーの残骸、パイプ、機器
類が変容している。

全てが生物となつて、脈打ち、呼吸し、体温調節分
泌液を滲ませている。

ドリス「——いやああああああ！」

ドリスの悲鳴が快樂門中に響き渡る。

エレベータ前

ブシュ！

エレベータから降り立つ、ジョー@アドミン。

快樂門の方を見て、目を細める。

マリスの部屋

再び歌を歌っているマリス。

軽やかに体を動かし、自己の体を巡る生命感の心地
よさを味わっている——。

快樂門前

ギツ、ギツ、金属音を響かせ、やってくるジョー。

そこにあるべき機械の音、機械の匂いがしない。

ジョー「！」

すぐ目の下に、ヘザーがいた。

ジョー「君は……」

ニッコリ微笑むヘザー。

ヘザー「こんにちは、ジョー@アドミン。ねえ……」

ジョー「ヘザー、だった者よ。君はまるでマリスと同じになつて

しまった……」

ヘザー「ええそうよ。ジョー」

ヘザー、ジョーの躰に触れる。

ヘザー「あなただつて——、あたしたちみたいな体になれるのよ？

キスをさせて」

少女ではあつても、男を悦ばせる為に造られた存在。

へザーの声は甘美に響く。

ジョー「キス、だって……？」

へザー、ジョーの冷たく固い腕に頬をすり寄せ、上目遣いでジョーを見る。

へザー「あたしのキスも甘いよ。マリスと同じに。してみたくない？」

催眠、否、ジョーの行動決定ロジックを混乱させている。

ジョーは、小さな少女の言うがままに身を屈め、その顔をへザーの前に。

ジョー「どうした事だ……。アドミンである私が——、どうしてもドールの——、ドールであった者の言葉に従ってしまうのだ……」

へザー「（くすくす）ジョー、あなたの事を愛してあげる」

ジョー「愛……？」

ジョーの顔を両掌で包むへザー。

マリスの部屋

歌っていたマリス——、物音に歌をやめ、暗い室内を見入る。

マリス「——ドリス……？」

暗がりから姿を見せるドリス。服は破れ、虚ろな顔。

ドリス「マリス@ドール……」

微笑むマリス。

ワークエリア

上位階層の通路。

そこを歩くアマンダ@ドール。

片側の壁は内装が剥がされ、筋肉組織の様に電気配線が露出している。

そこで、半田溶接作業をしている、チック@ソルダ。彼はそれがここでの仕事——。

アマンダ「チツク@ソルダー」

作業を止めて、アマンダの方を振り向くチツク。

チツク「——あなたは——、ドールか……？」

アマンダ「そう。私はドール」

チツク「ドールは同じマシナリーとは交わらない。そうじゃなかったのかい？」

アマンダ「そんな事、もうどうでもいい。来て。キスをしてあげるから」

チツク「キス？ ドールが、この俺に、キスをしてくれる？」

チツク、立ち上がる。

アマンダ、近づいてチツクを抱きしめ——

ねっとりとした口蓋を開いて、別の生き物の様な舌を蠢かせ——

チツクの冷たく固い顔に舌を這わせ——、

顔周辺の突起に唇をまわりつかせて悪戯っぽい目でチツクを見る。

チツク「うふう……」

突起を唇でしごく様に舐めた後、アマンダの唇はチツクの唇に向かっていく。

ダラリと下がったチツクの半田溶接アームが、未だ煙を薄く立ち登らせながら、ワナワナと震える。

マリスの部屋

マリスのすぐ前に着ているドレス。

マリスは聖母の様に微笑んでいるだけ。

ドレス「——お願い——。あたしにも、キスをして。お願い」

マリス「そう言ってくれるのを待っていたのよドレス。だってあなたはいつもあたしの言う事、聞いてもくれないし」

ドレス「今までの事は謝るわ！ もうあなたをおかしなドール扱いない。だから、だからお願いよ！」

すぎるドレスを優しく抱くマリス。

マリス「キス、してあげる……」

安堵の色がドレスの目に。

快樂門

ペタリと尻餅をついているヘザー。その頬には、鋭いものでつけられた傷。そこから血が沸きだしている。

ジョー「すまない。君が言う事を聞かないから——」

脅えた顔のヘザー、自分の頬にそつと指をあて、その指先についた赤い血を見る。

ヘザー「これなに？　ねえ、これなに？　い、痛い……。痛いのおお！」

マリスの部屋

ドリスの躰を優しく包む様に抱きしめたマリス、唇を薄く開けて——、目を閉じたドリスの唇を——

別のエリア

フラフラと歩くエルザ。

そして——、ミステイ……。

彼女達は快樂門の外に出いき、キスをして回るのだから。

ワーク・エリア

チツクの顔を抱き、キスをしているアマンダ。

その快樂に身を震わせているチツク——、その未だ熱い半田溶接アームが——、アマンダを抱き留める為に——アマンダの背に近づき——

アマンダ「！　ギャアアアアアアア！」

チツク「……アマンダ……？」

背中に焼き印を押されたアマンダ、狂った様に絶叫し続ける。

マリスの部屋

ギギツ。ジョーが入ってきた。

ジョー「マリス！ マリス！」

見回したジョー、慄然。

甘いキスに酔いぐったりしているドリスを抱き、座っていたマリス——、その妖しく光る目をジョーに向けた。

マリス「ジョー？ 待っていたのよ」

ジョー「君は、自分が何をしているのか判っているのか」

マリス「あたしはみんなを違うものにしてあげているの。あたしのキスは、みんなを幸せにしてあげる為のもの。そうでしょう？」

マリス、ドリスの躰を置いて立ち上がり、ジョーに近づく。

マリス「みんなこのままずっと、このオーガンで油をさして永遠に同じ事を過ごしていくなんて、つまらないと思っただに違いないわ」

ジョー「……」

マリス「あなただっけそう。この階層のアドミンを永遠に続けるなんて、つまらないと思わない？」

ジョー、マリスの腕を掴む。

ジョー「来るんだ」

マリス「（怪訝）え……？」

快樂門

生物と化した機器類が蠢く異様な空間。

それを見渡すジョーとマリス。

マリス「みんな、生きているのよ……」

ジョー、ヘザーを傷つけた鋭い爪で、機器の一つを刺す。吹き出す血。そして——

機器「きいいいいいい！」

耳を覆い、齧えるマリス。

ブルブルと震えた機器、やがて活動を止める。

ヘザーの声「マリスうう、まりすうう……」

泣きながら近づいて来るヘザー！

マリス「ヘザー……」

顔から夥しい血を滴らせ、洋服までも血に染めた姿。

ヘザー「あたしの体、変なお！ 痛いのおお！」

マリス「（横に首を振る）そんな……」

ジヨー「君がした事は、これなんだ！」

マリス「——嫌……」

快樂門にマリスの悲痛な声が響く。

マリス「（オフ）いやあああああああ！」

To Be Continued...